

「コミュニティハウス」は、中学校区程度の範囲を対象とした地域施設で、そのうち

「学校施設活用型」については、余裕教室の改造、増築、新築の三つの手法で整備が行われる。整備段階では、平成七年に策定された「コミュニティハウス基本構想」に基づいて、地域ニーズに対応できるように市民参加について配慮しているが、運営までつながる意識醸成は難しい状況である。しかし、開館後、工夫を凝らし市民が施設を自主的に活用している事例もある。ここでは、その中から、二つの事例を取り上げ、地域施設運営のポイントと課題を考えてみたい。

## 1 管理運営の工夫 2つの事例

●ケース1 「地域にコミュニティハウスができてよかったと思われる運営」が基本

◎施設を居心地のいい場所に  
親しみやすい空間にするために、市民や学校の協力を得て、工夫をこらしている。

ピアノから冷蔵庫・食器に至るまで、市民が提供してくれたものであるのは、自分たちの施設だという気持ちの表れだろう。また、それらの設備を利用者が自由に使用できる体制を組むことで、より一層の親近感を生み出

している。まさに「お金をかけずにいい施設を作り上げた」という観がある。

### ①サロン

学校の廊下部分を転換したこのスペースは、サロン・図書室・子供の遊び場の機能を果たしている。安全と保温のために使用するユニットカーペットには、中学校の美術部員がボランティアで描いたアニメキャラクターの絵が。壁には、木版画・水墨画教室の生徒から館長に送られた年賀状が所狭しと展示されている。暖かな雰囲気づくりのための工夫である。

### ②研修室

ピアノは市民が提供してくれたもの。コーラスグループや音楽講座での活用のほか、地域主催で中学校卒業生のピアニストのコンサートが毎年開催される等、フル稼働している。

### ③和室

市民から提供された炬燵・掃除機・アイロン等が押し入れに収納、自由に利用できる。姿見は着付け教室の生徒が持参したもの。卒業式には、ここが先生方の更衣室となる。(着付けも教室の生徒が引き受ける)学校と良い関係を作っていくことも肝心な要素。

◎利用者の自主性を育てる「禁止しない」管理運営とその効果

①「～してはいけない」等禁止の表示はない。

②休館日はない。職員の休務日は自主利用日・学校利用日としている。利用前日に鍵を受け取り翌日返却するという全くの自主管理方式にしているが、トラブルは一度もない。

③利用者が自主的にトイレの清掃をして帰ったり、暮れに大掃除にやってくる人もいる。そういう話をなるべく他の利用者にして自発性を促すことも忘れない。

④テニスコートの整備は一学期に一度、利用者が弁当持参で奉仕。謝意を表す意味で一か月に一度申し込みなしで自由にコートを使用してもらっている。この奉仕活動を通じて知り合った人たちのテニス大会が開催されるようになった。

⑤利用申し込みは二か月前から受け付けるが、予備日も考えてきてもらい、希望が重なった場合には、話し合ってから決めてもらうようにしている。利用者間で調整することによって、連帯感が生まれ、譲り合ってくれている。

⑥事業を企画する際には、館長と運営委員がとことん話し合う。職員と運営委員会が信頼関係にあることは、よりよい運営の秘訣。

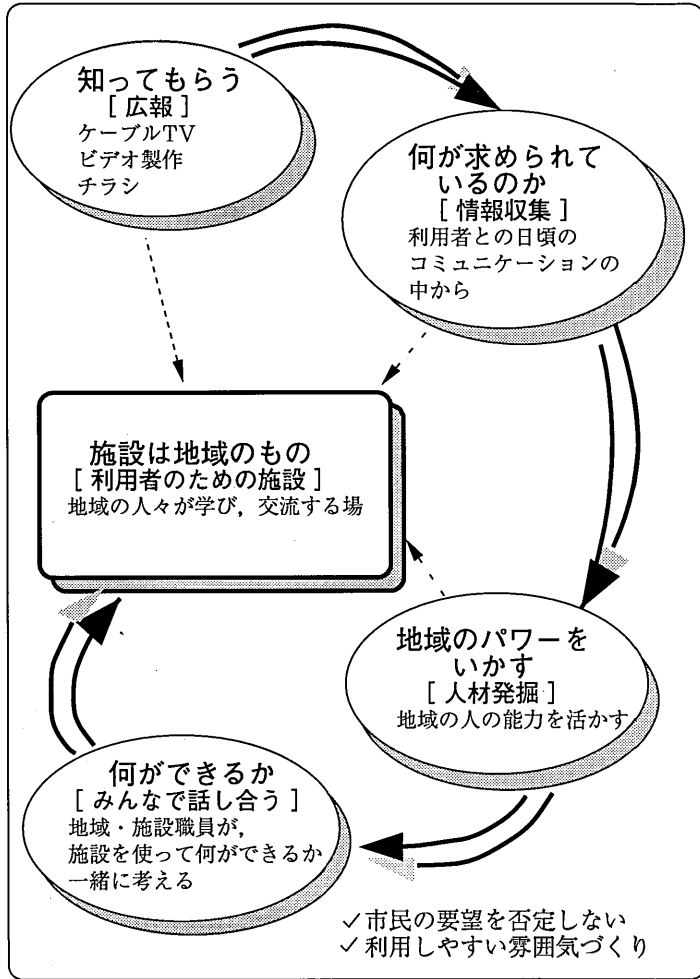
⑦学校との信頼関係を築くことも重要。学校が教師と生徒だけのものだという考え方はもう古い。地域と学校のいい関係づくりの接点

がコミュニティハウスだという認識が必要だ。

## データ

事業主体	教育委員会生涯学習課、市民局地域施設課 区役所地域振興課
事業名称	コミュニティハウス事業
施設概要	研修室、和室、交流コーナーなど/面積300m <sup>2</sup>
事業開始	平成元年
参加形態	コミュニティハウス設立準備会、 コミュニティハウス運営委員会

図-1 地域施設運営の考え方



一 特集・市民参加の実践 ① 市民参加実践事例集

●ケース2 「利用者のための施設」を基本に

◎施設は地域のもの(図-1)

施設を地域コミュニティの拠点とするためには、地域の人たちにこの施設を使って、何をしたいか、何ができるかを考えてもらうことが必要。そのためには、日頃のコミュニケーションを大切にし、利用しやすい雰囲気作りをすることが必要。また、その中から、地域の要望や人材発掘など貴重な情報を入手することもできる。

◎自主事業を通じて地域コミュニティづくりを(図-2)

施設整備の段階で果たせなかった住民参加

を自主事業で実現している。

図書貸し出し利用者に「ここでどんな自主事業があったらいいか」と声を掛けることから始め、各事業参加者が次の事業の企画運営に参加してくれるようコミュニケーションを図り、施設を地域コミュニティの拠点として機能させている。

△自主事業実施についての考え方  
 ・ 幼児から高齢者まで、それぞれの層に応じた事業を  
 ・ 必要課題は無料、なるべくオープン形式で  
 ・ 趣味的なものには有料で  
 ・ なるべく地域の人を講師・指導者に  
 ・ 参加から参画へ

- ・ 必要課題は無料、なるべくオープン形式で
- ・ 趣味的なものには有料で
- ・ なるべく地域の人を講師・指導者に
- ・ 参加から参画へ

・ 参加者同士の交流を

2 一 課題

●地域施設の最終目的は地域コミュニティづくり

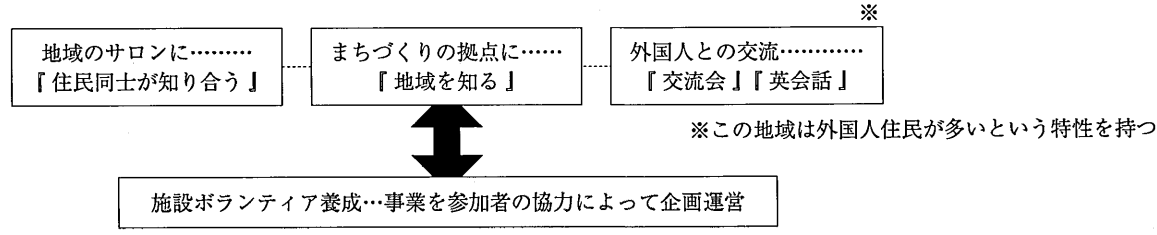
コミュニティハウス・地区センターといった地域施設は、整備すること自体に目をむけがちであるが、施設を整備しただけでは本来の目的を果たしたとは言えない。地域コミュニティの活動拠点として機能することこそ地域施設づくりの目標なのである。

特に、中学校区という比較的狭い地域を対象としたコミュニティハウスは、いかに地域に密着し、住民の施設として活用されるかが、ポイントとなる施設である。しかし、整備段階から住民意識を高揚させ、運営につなげるという手法がとりにくい状況である。(今後の動向に期待したいが)

そうした場合、運営段階で地域の実情に合った柔軟な対応をとりながら、自然に地域に溶け込んでいくよう誘導する必要がある。単なる貸館の機能しか果たし得ないのでは、死んだ施設になってしまう。前述の二つの事例のように、柔軟な対応で地域施設として成功するケースも存在するが、施設職員や地域のキーパーソンの資質によるところが大きい。

今後は、施設の管理運営について画一的な規則を設けるといった従来の方式を見直し、地域の实情に合ったルールづくりが可能となるようなシステムづくりが、必要となろう。

図-2 自主事業の内容とシステム



その他 空き部屋を若者に開放...自習室開放→若者たちの交流の場に